

横浜市民ギャラリー所蔵の漫画作品について —「ヨコハマ漫画フェスティバル」(1978年)との 関係を中心に

森 未祈

1. はじめに

横浜市民ギャラリーには約1,300点の所蔵作品があり、そのうちの76点を占めるのが大型の漫画作品である。1点あたり約100×70cmの着色された一コマ漫画の原画そのものが保存されている。著名な作家を多く含み、同ギャラリーのコレクションの中でも際立つ作品群である。1978年に開催された「ヨコハマ漫画フェスティバル」のために漫画家やイラストレーターが制作し、展示された後に収蔵された。しかしこれまでに展示の機会は少なく、同フェスティバルに関する資料もほとんど残されていないことから、一般に知られる機会に恵まれなかった。

筆者は2014年4月から2018年3月までの横浜市民ギャラリー在籍中、他の学芸員と共にこれらの漫画作品の展示を企画し、関係者に取材する機会を得た。また、展示期間中には多くの関係者や来館者からそれらの作品の価値や希少性が指摘された。今回新たに調査をおこなったところ、作品の存在自体を忘れており、同ギャラリーに収蔵されていたことに驚く当時の出品作家にも出会った。開催から40年以上を経て、当時を知る関係者も少なくなっていることから、できるだけ早期に記録を残しておくべきと考え、本稿では聞き取り調査を中心に、このフェスティバルが開催された経緯と、それにより形成された漫画コレクションの意義について考察する。

2. 「ヨコハマ漫画フェスティバル」について

2.1. 概要

ヨコハマ漫画フェスティバルは、1978年9月15日から10月4日まで横浜市民ギャラリーで開かれた展覧会だ。関内駅・伊勢佐木長者町駅・阪東橋駅の3駅を結ぶ「大通り公園」が同年9月9日に完成したことを記念して開催された事業の一つで、主催は横浜市民ギャラリーを含む「大通り公園完成記念行事実行委員会」である (fig.1)。

横浜市民ギャラリーは横浜市で初めての美術専門の展示施設を擁した社会教育機関として1964年に開館し、二度の移転と運営組織の変遷を経て現在に至



(fig.1)
「ヨコハマ漫画フェスティバル」チラシ 1978年

る¹。ヨコハマ漫画フェスティバルが開催されたのは、関内駅前の横浜市教育文化センター内に位置する二代目の横浜市民ギャラリーで、大通り公園の隣に位置していた。運営は横浜市教育委員会である。

同フェスティバルでは、漫画家やイラストレーターが横浜の名所や歴史、歌、事始めなどをテーマに、大型の作品を描き下ろした。9月12・13日に同ギャラリーの展示室が制作場所として開放され、多くの作家が現場で制作をした。この様子は一般には公開されなかった。完成した作品は、制作時のままパネルに水張りされた状態で1階展示室に並べられた。当時の出品目録は残されておらず、現存の資料では様々に表記されているため、それらから出品作家と出品作品の正確な数を特定することはできない²。

3週間足らずの会期を通しての総入場者数は36,725名だ。当時の新聞2紙は会場の盛況ぶりを以下のように伝えている。「初日の十五日は家族連れなど約三千人が訪れ、親子でクスクス笑ったり、歴史を扱った漫画では『昔は横浜にもこんなことがあった』とパパが授業を始めたり、なかなかのにぎわいぶり。これまで一日千人も入れば大入りだった同ギャラリーでは『こんなに人が入った展覧会は初めて』と満足そう。」³「漫画家らしいギャグ、風刺が随所に見られるのも、この作品展の楽しさ。(中略)子供から大人まで飽きさせない作品展だ。」⁴

また、当時の記録映像⁵が残されている。神奈川新聞社の記者だった脇坂茂樹氏が個人的に撮影したもので、横浜市民ギャラリーに保管されていた。そこにはオープン前の展示室で作品を描く作家らの姿(fig.2)と、開幕後たくさんの来館者で賑わう会場(fig.3)が写し出されており、当時の様子を伺い知ることのできる貴重な資料となっている。



(fig.2)
「ヨコハマ漫画フェスティバル」開幕前の会場での制作風景(記録映像からのキャプチャー画像) 1978年



(fig.3)
「ヨコハマ漫画フェスティバル」会場の様子(記録映像からのキャプチャー画像) 1978年

- 1 初代の横浜市民ギャラリーは桜木町駅前の旧中区役所庁舎を利用して開館し、1974年に関内駅前に開設された横浜市教育文化センター内に、2014年には再び桜木町駅を最寄りとする西区宮崎町に移転した。当初は横浜市総務局行政部が運営しており、1975年に横浜市教育委員会、1996年に財団法人横浜市美術振興財団(2002年から財団法人横浜市芸術文化振興財団)に代わった。
- 2 「ヨコハマ漫画フェスティバル」チラシ(1978年、横浜市民ギャラリー)によると主品作家30名、出品点数100点。『市民と学習』(1979年、横浜市教育文化センター文化事業部文化事業課)によると出品作家32名、出品点数80点。『教育文化センター文化事業のあゆみ 昭和49年度から昭和55年度まで』(発行年不詳、横浜市教育文化センター)および『横浜市民ギャラリー30周年記念誌 横浜市民ギャラリー [1964-1994]』(1995年、横浜市民ギャラリー30周年記念誌編集委員会)によると出品作家40名、出品点数76点。『毎日新聞』1978年9月16日16面記事では出品作家28名、出品点数80点、『神奈川新聞』1978年9月16日10面記事では出品作家32名、出品点数80点。
- 3 『毎日新聞』1978年9月16日、16面横浜欄
- 4 『神奈川新聞』1978年9月16日、10面地域欄
- 5 1978年撮影日不詳、Uマチック、カラー、サイレント、14分59秒。2018年にデジタル化をおこなった。

2.2. 横浜市民ギャラリーへの漫画作品の寄贈

ヨコハマ漫画フェスティバルに出品された作品は、閉幕翌日の1978年10月5日付けで横浜市民ギャラリーに寄贈された。現在所蔵されているのは32名の作家による76点である。これらが同フェスティバルに展示された全作品か否かについては、当時横浜市民ギャラリーの係長だった石井利夫氏⁶と、作家の調整役を担ったヒサクニヒコ氏⁷の双方より、同ギャラリーが寄贈を働きかけたのではなく、参加した作家たちが全作品をまとめて寄贈する意向を示したとの証言が得られた。このことから、現在横浜市民ギャラリーが所蔵する76点が、ヨコハマ漫画フェスティバルの全出品作品であると見なしてよいと思われる。本稿の末尾に所蔵作品のリストを掲載する。

3. ヨコハマ漫画フェスティバルの開催経緯

3.1. 横浜市の都市計画における大通り公園の重要性

ヨコハマ漫画フェスティバルの開催のきっかけとなった大通り公園⁸は、当時の横浜市民ギャラリーが入る横浜市教育文化センターの隣に位置していた。長さ1.2km、面積3.6haに及ぶ細長い公園で、「みどりの森」、「水の広場」、「石の広場」の3つのゾーンからなり、オーギュスト・ロダンらの彫刻が設置されている。時代と共に姿を変えてきたが、完成当時は大変な賑わいで、大通り公園は横浜市の都市計画の中で重要な位置を占めていた。

1963年から1978年まで横浜市長を務めた飛鳥田一雄(1915-1990)は横浜市の都市づくりとして六大事業⁹を掲げた。このうちの一つ「市街地中心地区強化事業」は、戦前の中心地区である関内、伊勢佐木町エリアと戦後の中心地区となった横浜駅周辺地区とが分断している状況を解消し、二つのエリアを結びつけてより強力な都心部を形成することが目的だった。その施策の一つが1968年に作成された「緑の軸線」構想であり、その中でも重要視されたのが大通り公園の建設であった。「緑の軸線」構想は、山下公園から日本大通り、横浜公園を経て、市庁舎(「くすの木広場」)をはさみ、大通り公園を通過して蒔田公園への都市の景観を整え、緑とうるおいを与える街づくりを目指すものだった。

『横浜＝都市計画の実践的手法 その都市づくりのあゆみ』によると、大通り公園は「今後の都市整備の軸となるものであり、横浜全市民の多目的利用の行える場とするため、設計には特に力を入れ」¹⁰たとある。巻頭には「祝大通り公園開園」の横断幕を掲げた「石の広場ステージ」の写真が掲載されていることから、当時の横浜市の大通り公園への力の入れようを伺い知ることができる。また、大通り公園と横浜市教育文化センターの関係について、都市プランナーの加川浩氏は「教育文化センター(を：筆者補)前川國男さん

6 いしい・としお=1941年横浜市生まれ、在住。1960～2001年横浜市職員。1972～1980年横浜市民ギャラリーに係長として勤務。本調査のため、2018年3月23日に横浜市民ギャラリーで石井氏に聞き取りをおこなった。

7 ひさ・くにひこ=1944年東京都生まれ。1951年横浜に転居して以降、横浜市在住。漫画、絵本、エッセイ、恐竜研究、テレビ・ラジオ出演など幅広く活動。2017年12月6日横浜市民ギャラリーにてインタビュー収録をおこない、その内容を編集の上「横浜市民ギャラリーコレクション展2018 写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に」(横浜市民ギャラリー、2018年、9-10頁)に掲載した。また、2018年3月23日に聞き取りをおこなった。

8 1970年に開発構想案がまとまり、1972年に建設が始まり、1978年9月9日に完成した。

9 1.市街地中心地区強化事業、2.富岡・金沢地先埋立事業、3.港北ニュータウン建設事業、4.高速度鉄道建設事業、5.自動車専用道路網建設事業、6.横浜港ベイ・ブリッジ建設事業(『横浜の都市づくり 市民がつくる横浜の未来』、横浜市、1965年、47頁)

10 田村明監修、1980年、鹿島出版会、108頁

に設計していただいた理由も、『都心部強化』等の空間をさらに向上させたいという背景がありました。当時の事業において、大通り公園は特別な位置づけなのです。』¹¹と述べている。

こういった一連の横浜市の都市計画の中心人物となったのは田村明(1926-2010)だ。田村はもともと浅田孝(1921-1990)を中心とした民間の地域開発コンサルタントである「環境開発センター」に勤めていたが、飛鳥田に乞われて横浜市に入庁し、企画調整室長、企画調整局長を経て技監となり横浜市の街づくりを推進した。飛鳥田が掲げた六大事業は、環境開発センターがおこなった横浜市の将来計画に関する基礎調査と報告書がもととなっている。

飛鳥田市政が目指したのは、戦後の整備が遅れ、停滞していた横浜市を活性化させることだった。そのために港湾地区の埋め立てや高速鉄道、高速道路、橋の建設など大型の都市開発を推し進める一方で、人を中心とした街づくりの視点も重視した。都市の中心には人々の行き交う姿があるべきだというビジョンに基づき、都心部の高速道路が地下化され、そこに大通り公園が建てられた。大通り公園は当時の横浜市政の都市ビジョンを体現する公共設計だった。

3.2. ヨコハマ漫画フェスティバルの構想と「漫画集団」の参加

こうして完成した大通り公園を記念する事業として、なぜヨコハマ漫画フェスティバルが構想されたのだろうか。出品作家の一人である柳原良平(1931-2015)¹²は2014年に横浜市民ギャラリーからの書面インタビューで以下のように回答している。「都市計画局の人からたのまれて、これからの横浜の未来像などマンガに描いたりしたので、それを大々的にやろうということになったのだと思います。マンガ集団のメンバーだったので仲間に声をかけました。集まるのが好きな人たちですから、みんな喜んで来てくれました。』¹³柳原は1964年に横浜市に転居して以降、横浜を拠点とした。1977年に「横浜市民と港を結びつける会」を結成して代表理事となり、その活動が評価されて同年横浜文化賞(文化活動部門)を受賞するなど、地域の活動にも深く関わっていた。こうした背景から、柳原が横浜市の職員と交流する機会は多かったはずで、先の証言の通り、彼と都市計画局との対話の中からこのフェスティバルの企画が構想されたのだろう。そして柳原が中心となり、「漫画集団」の仲間と、横浜在住の漫画家である森田拳次氏に参加が呼びかけられた。漫画集団は前身の「新漫画派集団」¹⁴から1945年に改名した、大人向けの漫画を描く作家たちの親睦団体である。

1978年8月10日付けの「『ヨコハマ漫画フェスティバル』参加についてのお知らせ」という資料が残っている。「漫画集団会員各位」の書き出しで、発行は「漫画集団事務局 今回担当 柳原良平」とある。そこには以下のように記されている。「先頃の7月例会で、横浜大通り公園オープンを記念する催し『ヨコハマ漫画フェスティバル』への参加が決められましたが、大要について会員の皆さんにお知らせ致します。この催しは横浜市教育委員会の横浜市民ギャラリーの計画によるもので、この9月にオープンされる横浜大通り公園の前にある同ギャラリーの1階展示室で開かれます。今回のフェスティバルの趣旨は一世紀をこえる国際港都ヨコハマの過去・現在・未来にわたるさまざまな顔を漫画家の創造力にゆだねて、楽しく夢のある催物を開き、多くの人々に親しんでもらうというものです。この計画に漫画集団の全面的な協力をという依頼があり、参加を決めたわけであります。」そして最後にこう記されている。「今回の催しの担当は、

11 鈴木伸治企画監修『都市をデザインする仕事』、横浜市立大学、2014年、62-63頁

12 やなぎはら・りょうへい=画家、漫画家、イラストレーター。

13 「柳原良平インタビュー」『閉館記念展 横浜市民ギャラリークロニクル1964-2014』横浜市民ギャラリー、2014年、12頁

14 1932年に近藤日出造、横山隆一、杉浦幸雄らが中心となり結成し、漫画家のマネージメントをおこなった。

柳原良平とヒサクニヒコです。]¹⁵ヒサ氏は漫画集団の会員で横浜在住でもあるため、柳原の要望によってこの企画への参画が決まった¹⁶。こうして柳原とヒサの両氏がこのフェスティバルの企画の中心を担うこととなった。

3.3. 漫画展の開催を決定した横浜市民ギャラリーの先駆性

横浜市民ギャラリーは開催館としてどのように関わったのだろうか。当時の横浜市民ギャラリーの係長であった石井利夫氏は以下のように話している。「当時、横浜の美術活動の核は市民ギャラリーで、館長の山田今次さんが有名でした。市民ギャラリーがいろいろな企画事業をやっていることは世の中に知られていたわけです。それで都市計画局から『自主事業の位置付けでヨコハマ漫画フェスティバルをやってください』と話に来られました。山田さんが『それはおもしろい話だ。横浜の歴史とか現代とかを漫画で表現したらどういふことになるのか非常に興味深い』と答えるやりとりがあり、一気に話が具体化しました。]¹⁷横浜市民ギャラリー初代館長の山田今次(1912-1998)は1964年から1978年3月までの在任で、同フェスティバル開催時にはすでに館長の職を辞していた。しかしこの石井氏の証言により、開催を決定したのが山田であったことが明らかになった。

山田は当時の横浜市政の文化面でのプレーンだった。飛鳥田は市政において文化を支える人物として山田を、都市計画を推進する人物として田村明を右腕とした。山田と田村が本件について話し合う機会もあったと推測される。そのため横浜市都市計画の中で特に重視された大通り公園の完成記念の事業を横浜市民ギャラリーで実施するのは自然な流れだったと考えられる。

また、山田は現代詩人でもあり、芸術家や美術評論家と親しく交流していた。常に新しいものを取り入れていくことに長け、草創期の横浜市民ギャラリーの運営方針は山田が形づくったと言っても過言ではない。石井氏の話の中には以下のようなエピソードもある。横浜市民ギャラリーで1964年の開館の年から開催している現代美術の年次展「今日の作家展」¹⁸では、教育文化センターから展示を拒否されるような作品もあった。しかし山田は先頭に立って周囲を説得し、展示の実現に漕ぎ着けたという。そのような館長だったからこそ、漫画の展覧会も難なく受け入れることができたのだろう。1970年代に美術専門の社会教育機関が漫画展を開催し、その作品を取蔵したことは他に例がなく、先駆的である。1990年、国立の美術館で初めて「手塚治虫展」¹⁹が開催された。これは国が漫画に芸術としての価値を認めた出来事としても捉えられている。そして日本各地の美術館で漫画展の開催が盛んになるのは1998年頃のことだ²⁰。横浜市民ギャラリーの例はそれを20年も先駆けており、ヨコハマ漫画フェスティバルがいかに先進的であったかが理解できる。横浜市民ギャラリーの運営には、山田今次の、美術だけにとどまらない文化を見渡す広い視点が活かされていたに違いない。

15 柳原良平「ヨコハマ漫画フェスティバル参加についてのお知らせ」1978年8月10日付 漫画集団会員に配布された印刷文書

16 前掲、註7、「ヒサクニヒコ インタビュー」(『横浜市民ギャラリーコレクション展2018 写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に』横浜市民ギャラリー、2018年、9-10頁)に未掲載の部分を横浜市民ギャラリー所蔵の録音音源より書き取り。

17 前掲、註6、石井氏への聞き取り。横浜市民ギャラリー所蔵の録音音源による。

18 1964年から2006年まで横浜市民ギャラリー主催で開催された。同ギャラリーでは、2006年から「ニューアート展」、2011年から「ニューアート展NEXT」、2016年から「新・今日の作家展」に名称を変更して、現代美術の企画展を継続している。

19 1990年7月20日～9月2日、東京国立近代美術館。愛知県美術館、神戸市立博物館、福岡市美術館に巡回した。主催は東京国立近代美術館、日本雑誌協会、朝日新聞社ほか。

20 『現代漫画博物館1945-2005 別冊・資料編』、小学館、2006年、102頁

4. ヨコハマ漫画フェスティバルの特異性

4.1. 柳原良平、ヒサクニヒコの両氏による企画の工夫

ヨコハマ漫画フェスティバルにおいて、横浜市民ギャラリーは事務局としての役割を担った。石井氏は以下のように述べている。「企画の委員には柳原さんにヒサさんが参画して漫画集団とかその他の漫画家に話をしてくれたんだよね。だから我々が動くことはありませんでした。(中略)展示の方法だとか広報の仕方だとかそういうのを市民ギャラリーで受けてやりました。展示の配置などはヒサさんや皆さんがおやりになり、我々はその手助けをしました。私たち職員は黒子的な役割で、展覧会の中心的なことは柳原さんとヒサさんの二人にお任せしたという感じでした。」²¹この役割分担により、柳原とヒサの両氏の手腕が遺憾なく発揮されることとなった。

二人はまず作戦を練った。ヒサ氏は以下のように語っている。「まず基本的に漫画家は締切を守らない。だからただ『描いて』と言っても作品は集まらないだろう。それだったら描くこと自身をお祭りにしちゃおうというので、横浜市民ギャラリーのフロアを全部使って、全員分のパネルと画材と食べ物を用意して、そこでみんなで騒ぎながら絵を描くと。終わった後は盛大に飲みにいこうと。それなら絶対つられてくるに違いないと、そういう呼びかけをしまして。」²²この二人の作戦は功を奏し、32名もの漫画家やイラストレーターが参加する大きな企画となった。石井氏は、作家がこの企画を「意気を感じて」無償で参加していたと証言している。

柳原とヒサの両氏は、横浜の名所や歴史、歌、事始めなどのテーマに沿った年表をつくり、あらかじめ参加作家に配布しておいた。作家たちは各々そこから自由に題材を選び、構想を練った上でギャラリーに集まった。前述した記録映像には作家たちが横浜市民ギャラリーの展示室に机やイーゼルを並べて制作する姿が写されている。この様子をヒサ氏は以下のように回想している。「漫画家は普段の仕事では机の上でせいぜいB5とかA4ぐらいの紙に描くのに、この時は大きく描くので大丈夫かなあとはらはらしたんですけれども。人前で絵を描くってなかなかない。ところが先輩たちを見ていると筆をサササと動かし、でかいのを上手に描く。『あなるほど、こんな描き方もあるんだ』と思ったりね。それから『なんか思ったよりうまくないな』とかね(笑)。絵が出来上がっていくプロセスもおもしろかったんですけれども、『これを絵にしたいな』と思った気持ちだけでも何か伝わるんだというのを感じました。テーマにこだわり過ぎて頭でっかちになるばかりじゃなくて、漫画というのは本当に楽しくて自由に描いていいものなんだとしみじみ感じたものです。楽しかったですよ、すごく。」²³初めは参加者を確保するために現場制作という手法が編み出されたが、結果としてこの展示室内に設えられた即席の共同アトリエが、作家たちの熱がぶつかり合う刺激的な場となったことがわかる。このフェスティバルは単なる展覧会ではなく、作家たちが一堂に会し切磋琢磨する場ともなったのだ。ヒサ氏が意図した通り、それはまさにお祭りのようで、現在で考えても稀有な企画だと言えるだろう。

21 前掲、註6、石井氏への聞き取り。横浜市民ギャラリー所蔵の録音音源による。

22 「ヒサクニヒコ インタビュー」『横浜市民ギャラリーコレクション展2018 写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に』横浜市民ギャラリー、2018年、10頁

23 同前

4.2. 時代を写す「漫画集団」の風刺性

ヨコハマ漫画フェスティバルに参加した作家の多くは、大人向けの一コマ漫画や風刺漫画を得意とした。そのため、一コマに表現を凝縮させることはお手の物だった。特に、ひねりの効いた笑いや情緒にあふれた描写、時代を反映した表現など、大人が楽しめる奥深い作品が多い。例えばヒサ氏が三溪園を描いた作品を、横浜市民ギャラリーが所蔵する櫻庭彦治が描いた油彩画《三溪園の五月(1)》(1979年、タイトルは当時の表記に基づく)と比較すると、櫻庭は豊かな植栽に囲まれた三重塔を描いているのに対し、ヒサ氏が描いたものはだいぶ様子が違う。《三溪園雪景色》と題された作品(作品リストCA-038、タイトルは当時の表記に基づく)には、雪が降る庭園の奥に三重塔、さらにその先には根岸の製油所の紅白の煙突が描かれており、手前にはそれを眺める和服姿の女性とロボットが佇んでいる。近代化により横浜が得たもの、失ったものを暗示するような表現だ。

漫画は、ユーモアや情感を通して、一コマの中に社会への風刺やメッセージを象徴的に表すことができる。漫画家は、物事を省略したりデフォルメしたりしてその本質を際立たせ、鑑賞者に訴える技術を持っている。また、魅力的なキャラクターを生み出し、その言動を通してメッセージを伝えることもできる。笑いやユーモアの背後に、時代のリアルな問題意識や社会への痛烈なメッセージを暗示させることも可能だ。ペンや絵筆が一本あれば、過去、現在、未来、場所を問わず、一コマの中に時空を超えた表現をすることもできる。このように漫画は、作家の技術と創造性によって一コマで物事を象徴的に表現し、人々に伝えることができるのだ。

漫画集団の全面協力のもと1954年に創刊した『漫画読本』²⁴は、大人たちの支持を得て大ブームになったが、1970年には休刊してしまう。それには、1950年代の終わり頃より子どものための漫画がコマ数の少ないものから長いストーリーの漫画へと移り変わり、大人向けの漫画にも波及して漫画の主流になっていったことが背景にある。次第に一コマ漫画や風刺漫画の発表の場は少なくなっていった。さらにヒサ氏が「一コマ漫画の作品はうまく残っていないんですよ。政治漫画みたいな時事漫画は、そのときを過ぎるとわからなくなってしまふから単行本にまとまったりしない」²⁵と指摘するように、一コマ漫画や風刺漫画は作品としての継承という点において不利な表現形式であるようだ。漫画集団は、日本で大人向けの漫画が興隆した時代を代表する存在であり、彼らが手がけた作品が横浜市民ギャラリーという公的機関に収蔵され、後世に継承されたことの意義は深いと言えるだろう。

24 文藝春秋新社(1966年から文藝春秋に改名)刊行。海外の漫画、戦前の日本の漫画、新作の漫画、エッセイを中心に構成され、戦後日本の「大人漫画」を牽引した。

25 前掲、註7、ヒサ氏への聞き取り。横浜市民ギャラリー所蔵の録音音源による。

5. 漫画コレクションの保存、活用と意義

5.1. 保存方法の見直し

これらの漫画作品はしばらくの間、制作当時のままパネルに水張りされた状態で保管されていた。1996年、横浜市民ギャラリーの運営組織が財団法人横浜市美術振興財団に移行すると学芸員が配置され、保存方法の見直しがおこなわれた。作品をパネルから外し、本紙のみの状態にして保存箱で保管するようになった。後述する1996年の展示の記録写真(fig.4)では、パネルに水張りされた状態の作品が確認できることから、その後の処置であることがわかる。これにより、合板パネルの影響による作品の劣化を防ぐことができたと考えられる。その甲斐もあり、多くの作品は現在も良好な状態で保存されている。2014年以降は作品のマット装を進めており、2019年2月現在49点が完了し、27点が未着手となっている。展示には額の準備も必要である。



(fig.4)
「横浜市民ギャラリー収蔵作品巡回展 漫画になったヨコハマ」会場風景 1996年

5.2. 再認識された漫画コレクション

ヨコハマ漫画フェスティバルの閉幕後、漫画コレクションが展示された記録として残っているのは、1996年7月16日から7月22日にかけて相鉄ジョイナスで開催された「横浜市民ギャラリー収蔵作品巡回展 漫画になったヨコハマ」²⁶だ。その後しばらくこれらの作品が脚光を浴びることはなかった。そして18年の空白期間を経て、2014年10月10日から10月29日に開催された「開館記念展 横浜市民ギャラリークロニクル1964-2014」²⁷で大々的に取り上げられることとなった(fig.5)。横浜市民ギャラリーが関内から桜木町に移転する際の約1年半の休館期間に所蔵作品の調査が進み、これら漫画作品の重要性が学芸員に再認識されたためだ。開館記念展では4フロアの展示室を全て使い、そのうちの3階部分で40点の漫画作品の展示と記録映像の上映をおこなった。久しぶりの大規模な展示となったため、これらの作品を初めて目にする来館者が多く、注目を集めた。以降、漫画作品は横浜市民ギャラリーのコレクション展で積極的に公開されている。



(fig.5)
「開館記念展 横浜市民ギャラリークロニクル1964-2014」会場風景 2014年 撮影：加藤健

また、開館記念展の関連事業として「漫画家親子対談 ヒサクニヒコ×久正人」²⁸を開催したことも付け加えておきたい。ヒサ氏の息子であり漫画家の久正人氏は、スタイリッシュな表現を特色とするストーリー漫画で人気を博す1976年生まれ漫画家であり、対するヒサ氏は1960年代後半のデビュー以降、一コマ漫

26 主催は財団法人横浜市美術振興財団・横浜市。

27 主催は横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）。担当学芸員は大塚真弓、森未祈、齋藤里紗。

28 マンガナイト代表山内康裕氏の企画協力により実現した。

画を活動の基軸としてきた。親子に共通する興味関心が垣間見えながらも、異なる世代における表現形式の違いが浮き彫りとなる対談になった。久正人氏はこの催しのために描き下ろした作品を投影しながら、時間とストーリーをコマ割りの中でどのように展開させていくかを説明した上で、ヒサ氏に「一コマ漫画では時間をどう表現するのか」という質問を投げかけた。するとヒサ氏はスケッチブックとマジックを取り、その中から考え事をする人物が描かれたページを開き、即興でクモの巣を描き加えた。画中の人物が思索に耽り長い時間が経過した状況を一コマで端的に表し、久正人氏と聴衆を驚かせた。父子いずれも漫画という視覚文化特有の表現を用いているが、形式が異なる点に世代の差が浮かび上がる。このように、1978年に描かれたヨコハマ漫画フェスティバルの漫画作品やその表現のあり方を、異なる世代の表現者の視点を介在させながら読み解くことは、それらの価値を再発見していく機会となるだろう。

この他、やなせたかしの《大佛次郎記念館上の鞍馬天狗》(作品リストCA-069)は、2018年に大佛次郎記念館の40周年記念展示に出品された²⁹。これらの漫画作品には横浜の名所を描いたものも多いため、今後この漫画コレクションの周知が進めば、このような活用や他館との連携の可能性も大いに期待できる。

5.3. 漫画コレクションの意義

これまで述べてきた通り、ヨコハマ漫画フェスティバルは大通り公園の完成をひかえた都市計画局と柳原良平との交流の中で発案され、都市計画局が横浜市民ギャラリーへ開催の打診をし、初代館長の山田今次が実施を決定した。作家たちは、大通り公園の完成を記念するフェスティバルのために横浜の過去・現在・未来をそれぞれ一枚の漫画に自由に表現した。それらが横浜市民ギャラリーに収蔵され、漫画コレクションが形成された。結果として、現在に継承された作品群は大通り公園の完成を記念するモニュメント的な意味を持つようになった。残された作品によって私たちは1978年の出来事を知り、当時を想起することができる。一般に大規模な公共施設の落成記念として彫像などの芸術作品を設置する場合、特定の権威ある芸術家に制作を依頼することが通例と思われる。しかしここでは「漫画集団」を中心とする複数の作家たちによって自由に制作された作品群が、作家たち自身の発意によってフェスティバルの場でもあった当の公的機関に寄贈されたことに大きな特徴がある。また、当時のフェスティバルには多くの来館者が駆けつけ、社会に歓迎された。そこには地域に根ざした祝祭性を感じることができる。ヨコハマ漫画フェスティバルは、横浜市政と作家の創造性が幸運にも実を結び、市民に歓迎された祭りとなったと言えるだろう。

このように、これらの漫画作品はコミュニティに深く根ざし、横浜という場所でしか成立し得ない、まさにサイトスペシフィックな作品だ。作品が生まれた背景には横浜市都市計画が存在し、作家は横浜という場所の特性を作品に取り込んだ。現場で制作された作品からは、作家が実際に横浜を訪れたときの直感や感触も滲み出てくるはずだ。鑑賞者は作家の目を通して描かれた横浜の姿を通して、地域を様々な視点から見つめ直すことができるだろう。これらの漫画作品は、地域を読み解く資料としても他に類を見ない価値を持ち続けるのではないだろうか。

また、一コマ漫画、風刺漫画といったジャンルは、現在ではストーリー漫画の台頭により触れる機会が少なくなっており、公的機関にまとまった数の作品が保存されたことは大変意義深い。『漫画読本』が大ブームになるなど、日本の漫画界で一時代を築いたといっても過言ではない漫画集団に所属した作家たちの作品群は、日本の漫画史という視点からも極めて重要な資料である。作家の個性を色濃く感じられる作品からは、描かれた当時の風俗や時代状況が克明に伝わってくる。そういった点からも、これらの作品は時を

29 大佛次郎記念館40周年記念 テーマ展示 I「大佛次郎記念館の40年 1978-2018」の前期展示(3月15日～5月6日)に出品。主催は大佛次郎記念館(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)。

経るほどに重要性を増すに違いない。

加えて、これらの漫画作品を、漫画を専門としない横浜市民ギャラリーが所蔵することにも価値を見出すことができる。同ギャラリーでは、漫画作品を油彩画や日本画と並べて展示することもある。これにより絵画の鑑賞を目的に訪れた来館者が、初めてこれらの漫画作品の存在を知り関心を示すことがあった。今後その逆もあり得るだろう。漫画が異なるジャンルの作品と並ぶことで、そのユーモアや風刺性といった特質がより顕著に現れるなど、作品の対比による効果が生じている。漫画作品が、横浜市民ギャラリーのコレクションの価値をも高めていると言えるだろう。

6.おわりに

本稿では、横浜市民ギャラリー所蔵の一連の漫画作品の成立と受贈の契機となったヨコハマ漫画フェスティバルの開催経緯と実相を明らかにした上で、同ギャラリーのコレクションとしての漫画作品の意義を考察した。個々の作品の詳細や、日本の漫画史におけるこれらの作品の位置付けについては十分に触れることができなかつたため、今後の課題としたい。

2018年の横浜市民ギャラリーのコレクション展³⁰において「漫画家・ヒサクニヒコが描いた横浜」と題した特集展示をおこなった。その際筆者は「職業体験学習」で受け入れた中学生たちと交流する機会を得た。それは、作品の展示方法について改めて考えることにもなった。一コマ漫画になじみのない若い世代は、鑑賞の仕方がわからないということに認識したのだ。ストーリー漫画が主流となった現在、一枚の絵の中に隠された物語やメッセージを能動的に読み解くという意識が希薄になっているようだ。本来であれば、漫画の中の笑いの意味を言葉にして解説することは無粋であるように思われる。しかし、発表から40年以上を経た現在、当時の時事的テーマなど、描かれた内容が一般には分かりにくくなった作品もあるため、作品ごとに解説を添えて展示することも有効なのかもしれない。こういった発見や調査結果を、今後の漫画作品の活用、公開に活かしていきたい。

謝辞：調査にご協力くださったヒサクニヒコ氏、石井利夫氏、故・柳原良平氏、日本漫画家協会、作品図版の掲載をご承諾くださった作家および著作権継承者の方々に深くお礼申し上げます。

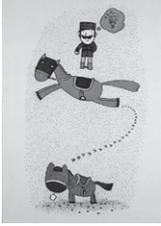
(横浜美術館鑑賞教育エデュケーター／学芸員)

30 2018年3月2日～18日「横浜市民ギャラリーコレクション展2018 写真と素描でたどる横浜 1950-1980年代を中心に」。主催は横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）。

横浜市民ギャラリー所蔵の漫画作品 リスト

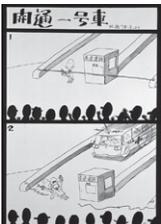
- 凡例
1. 作品データは、横浜市民ギャラリーの所蔵品番号、作家名、作品名、制作年、技法、サイズ(縦×横)の順に掲載した。所蔵は全て横浜市民ギャラリーである。
 2. 固有名詞の表記については、収蔵時のタイトル通りとした。
 3. 全ての作品はカラーだが、図版はモノクロで掲載した。

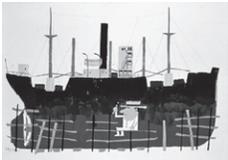
 <p>©赤塚不二夫</p>	<p>CA-001 赤塚不二夫 国際都市横浜 1978年 ペン、水彩、紙 72.4×102.6cm</p>		<p>CA-005 岩本久則 外人墓地 1978年 水彩、アクリル、紙 102.7×72.3cm</p>
	<p>CA-002 出水永 ガス事始 1978年 ペン、水彩、紙 102.6×72.5cm</p>		<p>CA-006 岩本久則 クイーンエリザベスの錨鎖 (カンカン虫) 1978年 アクリル、水彩、紙 102.4×72.4cm</p>
	<p>CA-003 イワタタケオ 雨のブルース 1978年 水彩、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-007 岩本久則 日曜学校(飛び方教室) 1978年 ペン、アクリル、水彩、紙 102.7×72.5cm</p>
	<p>CA-004 イワタタケオ 黒船 1978年 インク、水彩、紙 102.0×72.0cm</p>		<p>CA-008 小川哲男 西洋床屋 1978年 水彩、サインペン、紙 72.5×102.7cm</p>
			<p>CA-009 小川哲男 日本で初めてのビール工場 1978年 アクリル、水彩、紙 72.3×102.6cm</p>
			<p>CA-010 小川哲男 横浜の文士と画家 1978年 アクリル、水彩、ペン、鉛筆、紙 72.3×102.3cm</p>

	<p>CA-011 小島功 サンタ横浜上陸 1978年 アクリル、グワッシュ、水彩、紙 102.1×72.1cm</p>		<p>CA-017 塩田英二郎 ヘボン博士 1978年 パステル、マジック、水彩、鉛筆、紙 72.5×102.5cm</p>
	<p>CA-012 小島功 石けん事始 1978年 インク、水彩、紙 72.6×102.6cm</p>		<p>CA-018 杉浦幸雄 洋行帰り 1978年 墨、水彩、紙 102.4×72.3cm</p>
	<p>CA-013 小林治雄 米軍かまぼこ兵舎 1978年 ペン、アクリル、水彩、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-019 すずき大和 赤い靴 1978年 アクリル、マジック、紙 102.3×72.2cm</p>
	<p>CA-014 小林治雄 横浜駅西口広場 1978年 ペン、アクリル、水彩、鉛筆、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-020 すずき大和 想い 1978年 アクリル、マジック、ポスターカラー、紙 102.4×72.4cm</p>
	<p>CA-015 桜井勇 絵タイル 1978年 水彩、アクリル、鉛筆、紙 102.4×72.5cm</p>		<p>CA-021 鈴木義司 青い目をしたお人形 1978年 マジック、水彩、紙 102.5×72.4cm</p>
	<p>CA-016 桜井勇 窓を開ければみなとが見える 1978年 ペン、水彩、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-022 多田ヒロシ 青い目の人形 1978年 水彩、ポスターカラー、アクリル、紙 72.4×102.4cm</p>

	<p>CA-023 多田ヒロシ 日本最初の潜水業 1978年 水彩、アクリル、マジック、紙 102.8×72.6cm</p>		<p>CA-029 中島弘二 宇宙旅館「ひかわ」 1978年 ポスターカラー、墨、水彩、マジック、紙 72.4×102.8cm</p>
 <p>©ちばてつや</p>	<p>CA-024 ちばてつや 暗闇に黒船 1978年 水彩、マジック、木、糸、紙 72.6×102.7cm</p>		<p>CA-030 中島弘二 未知との遭遇 1978年 水彩、墨、マジック、紙 72.7×102.6cm</p>
	<p>CA-025 富永一朗 赤い靴 1 1978年 マジック、水彩、紙 72.8×102.6cm</p>		<p>CA-031 西村宗 金沢海の公園 1978年 マジック、水彩、紙 72.5×102.5cm</p>
	<p>CA-026 富永一朗 赤い靴 2 1978年 マジック、水彩、紙 72.4×102.5cm</p>		<p>CA-032 西村宗 新ふとう 1978年 マジック、水彩、紙 72.7×102.6cm</p>
	<p>CA-027 永井保 山ノ手・ゲーテ座 1978年 パステル、水彩、紙 72.6×102.7cm</p>		<p>CA-033 浜田貫太郎 クジラは大事に育てよう 1978年 マジック、水彩、パステル、紙 102.5×72.4cm</p>
	<p>CA-028 永井保 夜の横浜大栈橋 1978年 水彩、マジック、紙 72.6×102.7cm</p>		<p>CA-034 浜田貫太郎 横浜は昔昔から国際的な港でした 1978年 マジック、水彩、パステル、サインペン、紙 102.6×72.6cm</p>

	<p>CA-035 茨田茂平 秋の三溪園 1978年 ペン、クレヨン、パステル、紙 72.6×102.8cm</p>		<p>CA-041 ヒサクニヒコ 地下鉄開通 (モグラの運転手さん) 1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.5×72.5cm</p>
	<p>CA-036 茨田茂平 戦時中の金沢八景 1978年 ペン、クレヨン、パステル、紙 72.4×102.7cm</p>		<p>CA-042 前川かずお 牛なべこと始め 1978年 水彩、マジック、紙 72.1×102.5cm</p>
	<p>CA-037 ヒサクニヒコ SL開通(明治5年) 「横浜-新橋 30K」 1978年 マジック、水彩、紙 72.6×102.4cm</p>		<p>CA-043 前川かずお こんな海づり公園はごめん 1978年 水彩、墨、マジック、 ポスターカラー、紙 102.2×72.5cm</p>
	<p>CA-038 ヒサクニヒコ 三溪園雪景色 1978年 水彩、マジック、紙 102.5×72.3cm</p>		<p>CA-044 牧野圭一 遅れてきた黒船 1978年 水彩、アクリル、ペン、 ポスターカラー、紙 102.8×72.6cm</p>
	<p>CA-039 ヒサクニヒコ 市電廃止(昭41-47) [開通明治37年神奈川 -大江橋間] 1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.7×72.6cm</p>		<p>CA-045 牧野圭一 空中華街 [ラーメンの新しい食べ方] 1978年 水彩、アクリル、インク、紙 102.6×72.6cm</p>
	<p>CA-040 ヒサクニヒコ 占領下の伊勢佐木町 [カマボコ兵舎の林立] 1978年 マジック、水彩、アクリル、紙 102.5×72.3cm</p>		<p>CA-046 水野良太郎 国際港 1978年 水彩、マジック、紙 72.3×102.4cm</p>

	<p>CA-047 水野良太郎 港の見える丘公園 1978年 水彩、アクリル、紙 72.6×102.6cm</p>		<p>CA-053 森田拳次 ブルース 1978年 マジック、水彩、紙 102.4×72.4cm</p>
	<p>CA-048 御法川富夫 ヨコハマ未来図 1978年 鉛筆、ペン、クレヨン、 ポスターカラー、紙 102.9×72.5cm</p>		<p>CA-054 森田拳次 横浜スタジアム・横須賀線 1978年 マジック、水彩、紙 102.7×72.3cm</p>
	<p>CA-049 森田拳次 高速道路 1978年 マジック、水彩、クレヨン、紙 102.6×72.6cm</p>		<p>CA-055 森田拳次 横浜のこのごろ - 海釣り公園 1978年 マジック、水彩、紙 103.2×72.6cm</p>
	<p>CA-050 森田拳次 写真ことはじめ 1978年 マジック、水彩、ペン、紙 72.7×102.7cm</p>		<p>CA-056 矢尾板賢吉 おむかえ 1978年 木炭、紙 102.5×72.3cm</p>
	<p>CA-051 森田拳次 浜っ子ことば 1978年 マジック、水彩、 ポスターカラー、墨、紙 102.5×72.5cm</p>		<p>CA-057 矢尾板賢吉 濃霧の夜明 1978年 水彩、パステル、紙 102.8×72.5cm</p>
	<p>CA-052 森田拳次 ピール 1978年 アクリル、コラージュ、紙 102.8×72.6cm</p>		<p>CA-058 八島一夫 ヨコハマ・ドンタク 1978年 マジック、水彩、紙 102.3×72.3cm</p>

	<p>CA-059 八島一夫 横浜大空襲500機 [450まで数えられるってどう でもよいのよ早く逃げて] 1978年 マジック、水彩、紙 102.7×72.4cm</p>		<p>CA-065 柳原良平 元横浜正金銀行 (神奈川県立博物館) 1978年 ポスターカラー、紙 102.7×72.6cm</p>
	<p>CA-060 柳原良平 運上所と英一番館 1978年 ポスターカラー、紙 72.1×102.4cm</p>		<p>CA-066 柳原良平 横浜海洋科学博物館 1978年 ポスターカラー、マジック、 ペン、紙 102.6×72.6cm</p>
	<p>CA-061 柳原良平 大通り公園 1978年 ポスターカラー、紙 102.6×72.7cm</p>		<p>CA-067 柳原良平 横浜ドックのカンカン虫 1978年 ポスターカラー、ペン、紙 72.6×102.9cm</p>
	<p>CA-062 柳原良平 開港記念会館 1978年 ポスターカラー、紙 102.5×72.4cm</p>	 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-068 やなせたかし あんたが主役 港のマリントワー 1978年 アクリル、紙 102.7×72.4cm</p>
	<p>CA-063 柳原良平 機械製氷発祥之地 1978年 マジック、水彩、紙 72.5×102.8cm</p>	 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-069 やなせたかし 大佛次郎記念館上の鞍馬天狗 1978年 アクリル、マジック、紙 101.4×71.7cm</p>
	<p>CA-064 柳原良平 新港埠頭赤煉瓦倉庫 1978年 ポスターカラー、紙 72.2×102.5cm</p>	 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-070 やなせたかし 美味求真街 1978年 マジック、アクリル、紙 102.6×73.6cm</p>

 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-071 やなせたかし 港の花 1978年 アクリル、紙 102.6×72.5cm</p>		<p>CA-074 矢野徳 遊郭之図 1978年 マジック、水彩、紙 72.4×102.8cm</p>
 <p>©やなせたかし</p>	<p>CA-072 やなせたかし 山手教会 1978年 水彩、アクリル、マジック、紙 102.7×72.5cm</p>		<p>CA-075 山下紀一郎 このごろこのテの顔が モテやすよ ジャパンパンチ発刊 1978年 水彩、墨、紙 102.7×72.5cm</p>
	<p>CA-073 矢野徳 伊勢プラザ之図 1978年 マジック、水彩、紙 72.7×102.6cm</p>		<p>CA-076 山下紀一郎 らしゃめん あたしゃどういいうわけか ラーメンが大好き 1978年 鉛筆、水彩、アクリル、紙 102.6×72.5cm</p>

The Manga Works in the Yokohama Civic Art Gallery and the 1978 Yokohama Manga Festival

MORI Mineku

Of the approximately 1,300 works contained in the Yokohama Civic Art Gallery Collection, 76 of them are large cartoons. The single-panel color cartoons, measuring roughly 100-by-70cm in size, and for the most part made by notable artists, are an outstanding part of the collection. In 1978, to celebrate the completion of Odori Park, the gallery presented the Yokohama Manga Festival. The festival was organized by the Odori Park Completion Commemoration Executive Committee. The event, a display of works produced by manga artists and illustrators dealing with subjects such as the history and famous sights in Yokohama, songs, and beginnings, proved to be very popular, attracting a total of 36,725 visitors. The 76 works made by 32 artists were donated to the gallery the day after the festival closed.

Asukata Ichio (1915-1990), who served as mayor of Yokohama from 1963 to 1978, built Odori Park, which links three train stations, Kannai, Isezaki-chojamachi, and Bando-bashi, in an effort to promote the Center City Improvement Project. The park played an important role in the urban planning of the city, and at the time, the Yokohama Civic Art Gallery was located next to the park.

In conjunction with the staff at the City Planning Bureau, illustrator Yanagihara Ryohei (1931-2015) devised the concept of the festival, and enlisted members of the Manga Shudan (Manga Club) to take part in the project. The group was a social club for artists who made manga for adults. Its members included the Yokohama-based manga artist Hisa Kunihiro, who with Yanagihara played a key part in the festival. To encourage the club members' participation, the two men devised a plan to create a work space in one of the gallery's display rooms where the artists could make their works. After they were finished, the artists were treated to a banquet. Thus, the festival was not merely an exhibition, it was also a place where artists gathered and engaged in a friendly rivalry.

Moreover, according to Ishii Toshio, the gallery's chief clerk at the time, the City Planning Bureau approached the gallery regarding the festival, and it was the gallery's first director, Yamada Imaji (1912-1998), who decided to move forward with the event. Yamada was an important cultural advisor to Mayor Asukata as well as being a contemporary poet. Considering that it was not until the '90s that manga exhibitions came to commonplace at Japanese museums, holding an exhibition of this kind and acquiring cartoon works for the gallery collection in the '70s was truly a trailblazing undertaking. This is a clear reflection of Yamada's expansive viewpoint regarding not only art but culture as a whole.

As this explanation suggests, the Yokohama Manga Festival was conceived by Yanagihara and approved by Yamada in conjunction with the city's urban planning project. The works that were produced for the festival might also be seen as a monument commemorating the completion of Odori

Park. They are distinguished by the fact that a number of manga artists were asked to freely make the works and that they were welcomed by the local society. This conveys a sense of the deeply rooted festive spirit in the area. The cartoons that the artists made were site-specific works that could not have been realized anywhere else, making them valuable documents that provide special insight into the area. In addition, the fact that this collection of one-panel cartoons and caricatures (a medium that has greatly declined in popularity due to the rise of story-based manga) has been preserved in a gallery that does not specialize in manga is highly significant. When manga are displayed alongside works from other genres, it accentuates their distinctive characteristics. Manga use humor and emotion to symbolically express a satirical social idea or statement in a single panel. Thus, we might say that the inclusion of the form in the Yokohama Civic Art Gallery added outstanding value to the collection.

(Assistant Educator / Assistant Curator, Yokohama Museum of Art)